

# BOOK REVIEW

## ボロン プールペープ 生理学 辞書代わりに手元に置いておきたい一冊

鯉淵 典之(群馬大学大学院医学系研究科応用生理学分野)

最近、生理学の講義時間は、最も時間を割いていた医学科においても減少傾向にある。また、集中講義形式の授業も増え、学生は時に短期間で多くの知識を詰め込む事を強られる。そのため、効率を重視し、比較的薄めで図の多い教科書を好む傾向にある。翻って、本書は標準生理学やギャノン生理学など、比較的厚い標準的な生理学の教科書(1,000頁程度)と比べても、かなり重厚な仕上がりとなっている。従って、学生が通常持ち歩き、講義やその合間に講義内容の理解を深める手段として用いるためには必ずしも適当とは言えないかもしれない。しかし、著者のうち約半数がエール大学に所属し、おそらく緊密に連絡を取りながら制作したためか、体裁は見事に一貫性がとれており、各項目における記述の深度も一貫している。編者の意図通り、あたかも「一人の著者によって書かれたような」仕上がりとなっている。そのため、読み辛さを感じる事はほとんどない。

おそらく、本書は一頁目から最後まで読み切るような使い方をされる事は意図して作られていないのだろう。読者は自分に必要な情報を得るため、目次や索引を頼りに検索していく事になる。それを意識したためか、目次は活字も大きく、見やすい。索引も和文と英文に分かれていて、充実している。さらに本文では、各項目のキーセンテンスが小見出しとして用いられているため、自分が得たい情報にたどり着くのが容易である。また、図表はすべてカラーで、イラストは判りやすい。これらを総合すると、本書は生理学初学者のための書籍というよりは、医師や研究者など、生理学全



般を既に学んだ諸氏が、知識を深化させたり、曖昧な知識の確認のために用いるために最適と言えるかもしれない。また、生理学分野の教育者が講義に厚みを持たせるために用いる事も考えられる。辞書代わりに手元においておきたい一冊である。

敢えて難を述べるとするならば、各専門分野の研究者・教育者が執筆したとは言うものの、一貫性を重視して、限られた執筆者により作成しているため、細かい内容に一部不正確な部分があることである(例えば、甲状腺ホルモン受容体のDNAとの結合の図において、ヘテロ2量体をつくるレチノイン酸X受容体との結合が逆になっている)。また、和訳は十分推敲され、日本語としても

違和感のない出来上がりとなっはいるが、用語の訳など一部には改善した方がよい部分も散見される(初版なので、仕方がないと思うが)。たとえば「アデニルシクラーゼ」という訳が頻繁に出てくる。おそらく原文も adenylyl cyclase となっており、原文に忠実に訳したのだろうが、日本で

は「アデニル酸シクラーゼ」が通常用いられている。今後医学用語辞典などを参照し、用語の統一をさらに図れば、より判りやすい教科書になるだろう。

荒削りな面もまだあるが、今後の発展が期待できそうな教科書である。